小論文合同学習会の詳細を紹介

他校の生徒との「化学反応」で、学びの相乗効果が生まれる

近畿地区専門高校３校連携

京都府・京都市立京都工学院高校、兵庫県・私立神戸星城高校、奈良県・大和高田市立高田商業高校

2015 年度から、近畿地区専門高校３校が中心となり、小論文合同学習会を実施しています。
学校や学科、住む地域の異なる生徒同士が、
対話を通じて広い視野を獲得していく様子を、VIEWnext高校版 10 月号で紹介しました。
本記事では、2021 年9月に全６校が参加してオンラインで実施された
小論文合同学習会の模様を詳しくリポートします。

VIEWnext 高校版 10 月号「誌上で見学 学びの next」は、こちらをクリック

本記事のコンテンツ

1. 実施の背景　複数校の生徒による対話が、学びの相乗効果を生む
2. 学習会のリポート　異なる視点がぶつかって起きた「化学反応」
3. 生徒の成長　他校の生徒の発想に驚き、学びへの意欲をさらに高める

京都府・京都市立
京都工学院高校
有本淳一
ありもと・じゅんいち

教職歴26年。同校に赴任して６年目。進路指導主事。理科。

学校概要

◎京都市立伏見工業高校の全日制と、京都市立洛陽工業高校が統合再編し、2016 年４月に開校。理工系大学を目指す進学型専門学科のフロンティア理数科、「ものづくり」と「まちづくり」の２分野４領域（メカトロニクス、エレクトロニクス、都市デザイン、建築デザイン）から成るプロジェクト工学科を擁する。

設立　2016（平成 28）年
形態　全日制／フロンティア理数科、プロジェクト工学科／共学
生徒数　１学年約 240 人
2021 年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、筑波大、京都工芸繊維大、大阪大、神戸大などに 20 人が合格。私立大は、京都産業大、同志社大、立命館大、龍谷大、関西大などに延べ 218 人が合格。
URL　http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=300254

兵庫県・私立
神戸星城高校
近藤直輝
こんどう・なおき

教職歴31年。同校に赴任して31年目。教務部長。２学年主任。国語科。

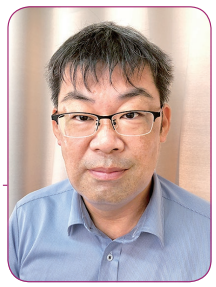
学校概要

◎建学の精神に「役立つ教育」「らしくの教育」「健康教育」を掲げる。卒業して 10 年後に開花する教育「S28 プロジェクト」を導入し、アントレプレナーシップ教育や言語能力の育成に力を入れている。１人１台配布のパソコンや電子黒板、ドローン、ロボットといった各種機器を有効活用したＩＣＴ教育も充実している。

設立　1929（昭和４）年
形態　全日制／商業科／共学
生徒数　１学年約 390 人
2021 年度入試合格実績（現役のみ）　国公立大は、静岡大、岡山大、長崎大、京都府立大、兵庫県立大などに 74 人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、関西大、関西学院大などに延べ 286 人が合格。
URL　https://www.seijoh.ac.jp

奈良県・
大和高田市立
高田商業高校
大島利隆
おおしま・としたか

教師歴21年。同校に赴任して21年目。指導主事。国語科。



学校概要

◎「礼儀」「清純」「誠実」を校訓に、「人づくり」を目標として、挨拶や言葉遣いなどのビジネスマナー、より高い専門知識・技能の習得に力を入れる。各種資格・検定試験の指導も充実しており、全国商業高校協会の検定１級に３種目以上合格する「3冠」達成者が多い。ソフトテニス部を始めとして、部活動も盛ん。

設立　1954（昭和29）年
形態　全日制／商業科／共学
生徒数　1学年約200人
2021年度入試合格実績（現役のみ）　国公立大は、滋賀大、長崎大、大阪市立大などに22人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ124人が合格。
URL　http://web1.kcn.jp/ichisho/

2021年度参加校

京都府・京都市立京都工学院高校
大阪府立今宮工科高校
兵庫県・私立神戸星城高校
奈良県・大和高田市立高田商業高校
福岡県・福岡市立博多工業高校
福岡県・私立福岡女子商業高校

1 実施の背景

複数校の生徒による対話が、学びの相乗効果を生む

2015年度、京都府・京都市立京都工学院高校、兵庫県・私立神戸星城高校、奈良県・大和高田市立高田商業高校の３校がスタートさせた小論文合同学習会。そのねらいは、他校の生徒との小論文の相互評価や対話を通じて、広い視野や自分の考えを客観的に捉える力、多様性を理解する力などを育むことだ。他校の生徒と学ぶ意義について、高田商業高校の大島利隆先生は、次のように語る。

「専門高校は同質性が高いため、価値観が異なる相手に対して自分の考えを伝える力が育ちにくい面があります。他校の生徒との交流によって、コミュニケーション力が鍛えられ、生徒の学びが広がることを意図して、合同学習会を企画しました」

神戸星城高校の近藤直輝先生も、専門科目で特定の分野を深めている生徒だからこそ、他校生との交流が重要だと語る。

「異なる考えを持つ同年代の存在に気づき、多様性を理解できると、結果的に自分の学びを客観視して、さらに専門性を深めることにもつながります。異なる専門を持つ生徒同士の対話による『化学反応』も期待しました」

2015年度以降、学習会は参加校を増やしながら２泊３日の合宿形式で毎年実施してきた。2020年度からはコロナ禍の影響でオンラインによる１日での実施とし、2021年度は６校が参加した（**写真１。プログラムはP.3図１参照**）。

写真１　学習会に参加した生徒たち。オンラインの利点を生かして、遠く離れた高校の生徒同士が小論文を題材に学びを深めた。

2 学習会のリポート

異なる視点がぶつかって起きた「化学反応」

開講式は、参加した生徒に学びの意義を考えさせることから始まった。京都工学院高校の有本淳一先生は、「違う学校の人と一緒に小論文を勉強する意義は何だと思いますか。皆さんは、何を学ぶためにこの取り組みに参加しましたか」と問いかけた。そして、「コロナ禍による臨時休業を経験したことで、『自分が動かないと、事態は動かない』と学んだはずです。学びとは、意味や意義を理解して、自ら進んで行動することです」と伝えた。

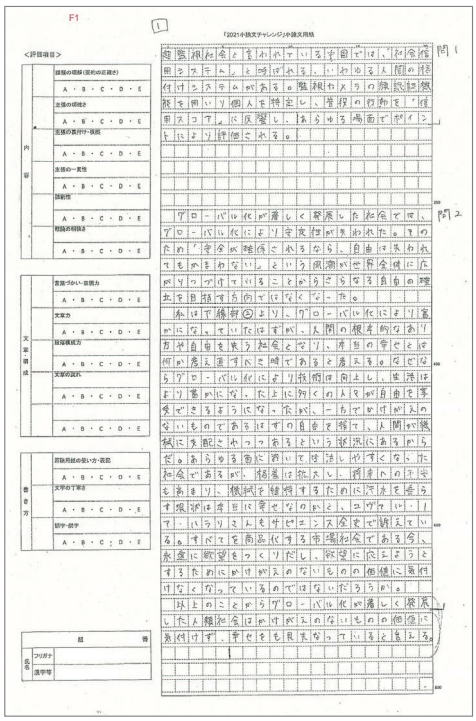
そのような投げかけで生徒の思考が動き始めたところで、有本先生は、合同学習会の目的として、「得意分野の異なる人との触

図1「2021年度　小論文合同学習会」プログラム

開講式	主催者から挨拶と趣旨説明を行った。
講義❶	アイデアの出し方や小論文の書き方などを、教師が説明。併せて、グループワーク❶～❸の進め方として、小論文の読み方と評価規準を伝えた。
グループワーク❶	生徒は4～6人から成る班に分かれ（以下、グループワークは同じメンバーで実施）、班のメンバーが事前に書いてきた小論文をその場で読み、その中からよいと思った小論文とその理由を、班内で発表し合った。
グループワーク❷	新たな小論文のテーマについて、まず個人で考えた後、その考えを持ち寄って班で議論し、小論文の構成案を作成した。
小論文作成	休憩後、グループワーク❷で提示されたテーマで、各自が小論文を作成した。
講義❷	グループワーク❶で各班が評価し合った内容に対して、教師がフィードバックを行った。
グループワーク❸	休憩後に各自で作成した小論文を、班のメンバーで読み合い、各自がよいと思った小論文とその理由を発表し合った。
講義❸	グループワーク❸で各班が評価し合った内容に対して、教師がフィードバックを行った。
閉講式	主催者からまとめと振り返りを行った。

※有本先生提供資料を基に編集部で作成。

図2　事前課題の小論文



生徒が取り組んだ事前課題。左側に「内容」「文章構成」「書き方」をそれぞれ評価する欄が設けられており、グループワークで相互評価する際に用いられた。　※有本先生提供資料をそのまま掲載。

長岡技術科学大学の過去問題は、下記参照。
https://www.nagaokaut.ac.jp/nyuushi/nyugakushiken/kakomon/suisenkakomonb1_r3.files/b1suisen_r3.pdf

れ合いを通じて、多様な視点・考え方を身につけること」「主体的に考え、行動し、自ら積極的に発言すること」の2点を伝え、生徒が合同学習会の目的を意識しながら学べるよう、導いた。

開講式後、まずはグループワーク❶に取り組んだ。班は、複数校の生徒4～6人で構成。事前に全参加者が同じテーマで書いてきた小論文のうち、班のメンバーが書いてきたものを読み合い、それらの中からよいと思った小論文とその理由を班内で発表し合った（**図2**）。発表では、「自分の主張と根拠の間に改行を入れると、より分かりやすくなると思いました」「要約では、具体例を省き、キーワードを抽出して抽象化できているものがよかったです」といった様々な気づきや考えが聞かれた。

京都工学院高校からは小論文を苦手とする生徒も多く参加したが、グループワークで「よい」と評価された小論文を書いた生徒もいた。有本先生は、工業高校の学びの強みを再発見できたと語る。

「事前課題の2問のうち1問は、グラフからデータを読み取って論じる問いでした。本校では、1年次から実習レポートを書く機会が多く、データの分析力を習得している強みが表れたのでしょう。当該の生徒は、『他校の生徒には文章力ではかなわなかったが、データの読み方を褒められてうれしかった』と、自信を深めていました」

続いて、近藤先生が、事前課題で着目すべき点や論理展開の例を具体的に解説すると、班で議論した直後とあって、生徒は身を乗り出して解説に耳を傾けていた。近藤先生は、「どの班でも、他校の生徒の意見を引き出しながら対話を進める姿が見られました。まさに、社会に出てからも生きる力を発揮していると感じました」と、グループワークに取り組む姿勢を評価した。

グループワーク❷では、長岡技術科学大学の入試の過去問題から、「製品の品質管理」について論じられた課題文の問題が出された。近藤先生は、問題選定の意図を次のように説明する。

「課題文では、『開発』や『設計』などの言葉が多く用いられ、工業分野にやや寄った内容でしたが、品質工学に不可欠な概念である『消費者』が取り上げられていたため、工業高校と商業高校の生徒から、それぞれ異なる発想が出るのではないかと期待しました」

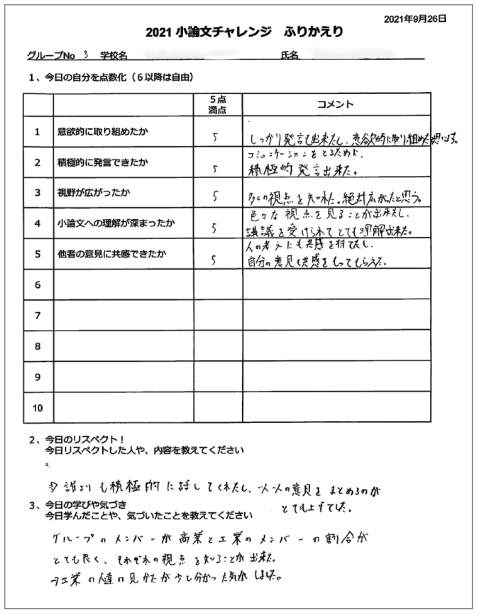
グループワークでは、メンバーそれぞれが小論文の構成を出し合って、どのような構成がよいかを議論した（**P.4写真2**）。大島先生は、生徒に、「メンバー全員が同じ構成・内容の小論文を書くことを目指しているわけではありません。それぞれの意見を聞き、自分は何を取り入れるのかをよく考えてください」と呼びかけた。

そして、生徒個々に小論文を作成。休憩を挟んだ後のグループワーク❸では、メンバー全員の小論文を読み、よいと思った小論文と、その理由を発表し合った。

講義❸で、大島先生は、「最初のグループワークの時と比べて、皆さん、分析と発表が上手になりましたね」と評価した。その理

写真２　班ごとのディスカッションの様子。どの生徒も、オンライン会議システムの操作には慣れており、適宜、資料を画面共有しながら、スムーズに意見交換が行えていた。

図３　生徒の振り返り



2021年9月26日

2021 小論文チャレンジ　ふりかえり

グループNo　3　学校名　　氏名

1、今日の自分を点数化（６以降は自由）

		5点満点	コメント
1	意欲的に取り組めたか	5	しっかり発言も出来たし、意欲的に取り組めた思います。
2	積極的に発言できたか	5	コミュニケーションをとれた、積極的発言出来た。
3	視野が広がったか	5	多くの視点を知った。絶対大かんじ思う
4	小論文への理解が深まったか	5	色々な視点を見ることが出来たし、講義を受けられてとても理解出来た。
5	他者の意見に共感できたか	5	人の考えに共感を相談し、自分の意見に共感をもってもらえた。
6			
7			
8			
9			
10			

2、今日のリスペクト！
今日リスペクトした人や、内容を教えてください

多くの人も積極的に話してくれたし、人々の意見をまとめるのがとても上手でした。

3、今日の学びや気づき
今日学んだことや、気づいたことを教えてください

グループのメンバーが商業と工業のメンバーの割合がとても良く、それぞれの視点を知ることが出来た。
工業の人達の見方が少し分かった気がしました。

生徒の振り返りには、全項目で、前向きなコメントが書かれていた。主体的に学習に取り組んだことへの達成感が垣間見られる。

※有本先生提供資料をそのまま掲載。

3　生徒の成長

他校の生徒の発想に驚き、学びへの意欲をさらに高める

由について、次のように話す。

「グループワーク❶では、相手への気遣いもあり、どの生徒も無難な発言をしていました。そうした様子は、校内のグループワークでもよく見られます。しかし、合同学習会では、校内に比べて、多様な考えを持つ生徒がいることに気づき、あいまいな発言では意図が伝わらないと分かったからでしょう。その後のグループワークでは、どの生徒も自分の考えを論理的に説明するようになり、一歩踏み込んだ議論が展開されました」

教師が期待した「化学反応」も随所に見られた。工業高校の生徒が、よい小論文として、商業高校の生徒が書いた小論文を挙げ、「マーケティングという商業ならではの視点は、私にはなく、ユニークと感じました」と指摘。ファシリテーターを務めた教師も、「異なる学科に所属する生徒が、それぞれの知識や発想を持ち寄り、議論を深める様子に感動しました」と語っていた。

学科による特性の違いは、議論に対する姿勢にも表れていた。工業高校の生徒は自分なりの考えを強く主張し、商業高校の生徒は客観性を重視した意見を述べることが多かったと、参加校の教師の誰もが指摘した。有本先生はこう語る。

「工業高校の生徒の多くは、自分の専門性を突き詰めてしまいがちで、その傾向は今日の議論にも表れていました。しかし、商業高校の生徒との対話を通じて、『自分の考えは偏っていないか』と疑問を持てるようになったことは、成長への大きな一歩です」

閉講式では、神戸星城高校の卒業生２人が登壇。兵庫県立大学大学院を卒業後、専門知識を生かして企業の再生・経営に携わる濱家（はまいえ）幸太さんは、「社会では、文章を書く機会がとても多いので、その力が身についていると大きな自信になると思います」と語り、経営コンサルタントとして活躍し、福岡女子商業の職員でもある長谷川孝史さんは、「社会では、どのような価値を提供できるかが重要です。自分のやりたいことも大切ですが、自分は社会に何を提供できるのかも考えてみてください」と、激励の言葉を述べた。

事後の振り返りでは、多くの生徒が、「視野が広がった」「積極的に発言できた」「他者の意見に共感できた」などの項目に高い点をつけていた（**図３**）。商業高校の生徒は、「自分の小論文と、他校の生徒の小論文の書き方に違いがあったり、一人ひとりの視点が違っていたりするなど、小論文の面白さを知ることができた」と振り返っていた。

「今回の合同学習会だけで、小論文を書く力が大きく伸びるわけではありません。しかし、自信のあった生徒が他校の生徒の視点や発想に驚き、『まだ学ぶべきことは多い』と述べていました。そうした気づきは、成長への大きなステップになります。生徒が合同学習会の経験を最大限生かせるよう、卒業までしっかり支援していきます」（大島先生）